博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	阿部　貴子
論　文　題　目	初期瑜伽行派におけるヨーガ理論の形成：『瑜伽師地論』「声聞地」の研究

審査要旨

『瑜伽師地論』「声聞地」（以下『声聞地』）は、インド瑜伽行派現存最古の文献である『瑜伽師地論』中でも最古層と考えられているもので、その重要性は夙に認識されていたが、従来は写本の不鮮明な写真にもとづく不完全な校訂本しか存在しなかったため、包括的研究が難しかった資料である。しかし写本の鮮明な影印版(1994)に基づく新しい校訂本『瑜伽論　声聞地』(1998-2018)が、請求者阿部貴子氏自身を主要メンバーとする大正大学声聞地研究会により発表されたことによって、より網羅的な研究が可能になった。本学位請求論文は、この新たな校訂本を駆使して、『声聞地』をインド仏教思想史上に位置づけ直そうとした意欲的な研究である。

本論文は、序論、第1部「『声聞地』のヨーガ体系」、第2部「五停心観の考察」、結論からなり、さらに「『瑜伽師地論』「思所成地」体義伽他と『声聞地』部分テキストと和訳」、「『禅秘要法経』における不浄観と浄観」、「『梵文瑜伽書』(*Yogalehrbuch*)の入出息念：初期密教文献との関連」の三つの附論が付されている。

序論では『瑜伽師地論』全体の構成やこれまでの研究状況、『声聞地』自体の構成やそれに対する先行研究を紹介した上で、阿部氏自身の問題設定を行なっている。そこで提起されている課題は以下の通りである。比較文献学的観点からは、従来衆護の『修行道地経』その他の禅経典、またそれらと密接な関係にある馬鳴の『サウンダラナンダ』が『声聞地』の先駆形態を示すものとして注目されていたが、それらの文献と『声聞地』との対応関係の検討は部分的なものに止まっていた。今回改めて『声聞地』と先行文献をより包括的に比較検討することにより、その関係性を再確認する。また、説一切有部（以下「有部」）の初期アビダルマ文献『法蘊足論』は、有部の実践法を伝えるものとしてこれまでも注目されていたが、『声聞地』との関係については特に注意されていなかった。本論文では、その関係を詳細に検討する。また、『声聞地』が多くの阿含経典に基づいていることも従来から指摘されていたことであったが、これまでの研究は主として対応関係の指摘に止まっており、内容に立ち入っての検討は不十分であった。今回はそれらの内容に立ち入って詳細に比較検討する。また教理面では、『瑜伽師地論』に見られる思想と譬喩者・経量部の思想との密接な関係性は従来から種々議論されていたところであったが、いまだ定説には至っていないので、その議論への一助として『声聞地』に見られる譬喩者・経量部的要素を検討する。これらの検討を踏まえて、『声聞地』の独自性を明らかにし、また四つの「瑜伽処」からなる『声聞地』の成立過程についての仮説を提出する。

このような問題意識を踏まえて、第1部では、まず『声聞地』および禅経典にみられる「瑜伽師」の用例を比較検討してその密接な関係を再確認し、つぎに『声聞地』の止観理論における「止(心を静める)・挙（心を奮い立たせる）・捨（心を平静に保つ）」の行法の意義を検討し、さらには第一・第二瑜伽処における修行道の体系が特に『法蘊足論』と密接に関係していることを明らかにして、最後に第二瑜伽処と第三瑜伽処における止観理論の相違を論じた。

第2部では、第二瑜伽処と第三瑜伽処に説かれる五停心観、すなわち不浄観・慈愍観・縁生縁起観・界差別観・入出息念のそれぞれを、典拠もしくは先駆となりうる諸文献と詳細に比較しつつ検討している。

附論では、『声聞地』と関わりの深い『瑜伽師地論』「思所成地」中「体義伽他」およびその註釈の一部に対する校定テキストを準備した上で、そこに説かれる止観論につき論じた。ついで、『声聞地』との直接の関わりは薄いものの、5世紀頃に成立した重要な実践文献である『禅秘要法経』と『梵文瑜伽書』の意義について検討して、両者が密接に関係し、特に後者が初期密教的要素を持っていることを論じた。

このような検討を通して、阿部氏は以下のような結論に到達している。修行道の構造に関しては、従来指摘されている通り『修行道地経』・『サウンダラナンダ』との関係性が深い。また、後者に関しては『声聞地』との間に

氏名　阿部　貴子

内容上も注目すべき類似性が認められる。ただし、具体的な修行法の叙述に関してはこれらの文献に直接依拠する点は必ずしも多くなく、むしろ阿含経典、特に『雑阿含経』と『中阿含経』に直接依拠している点が多い。この点に関しては、先行する禅経典の伝統を踏まえながらも、直接阿含経典に依據している姿勢を示すことによって、それまでの瑜伽師との違いを示そうとしたのかも知れないと阿部氏は推測している。また、『声聞地』が多くの重要な点で有部の『法蘊足論』に依拠していることを明らかにした。教理的側面では、種子説や縁起説に関して譬喩者・経量部と共通する要素が『声聞地』に見られることを再確認したが、実践論に関しては譬喩者・経量部のものとは大きく異なっていることも指摘している。『声聞地』には、転依説・種子説・縁起に関する二世一重因果説、また認識対象を「名称・仮名・言説のみ」と観察すること、さらには影像・勝解の議論等、後世の瑜伽行派の教理展開上重要な要素の萌芽が既に見られる。このような点を阿部氏は先行文献に対する『声聞地』の独自性と捉えている。最後に『声聞地』の成立過程に関しては、現形の『声聞地』には論述の重複や不連続等、多くの不整合な点が認められるが、阿部氏は、これらは段階的成立を示すものでは必ずしもなく、むしろテーマに応じて執筆の分業がされていたからではないかと推察している。

以上、多岐に亘る本論文の内容を的確に要約することは容易ではないが、概略を紹介してきた。その論考には、永年『声聞地』研究に取り組んできた申請者ならではの豊かな知見が多く盛り込まれており、極めて有意義なものである。特に有部文献である『法蘊足論』と『声聞地』との密接な関係は、従来殆ど注意されていなかったことで、重要な指摘だと言えよう。瑜伽行派が広い意味での有部の流れに属していることは以前から知られており、『阿毘達磨大毘婆沙論』等の有部文献に言及される「瑜伽師」と瑜伽行派を形成した実践者達との関係も推察されていたが、両者の間の具体的な関係については不明なままであった。今回阿部氏が指摘した実践法の広範な類似性は、最初期の瑜伽行派と有部との間に共通する実践の伝統があったことを強く示唆する知見であって、注目に値する。もとより、あらゆる研究がそうであるように、本論文にも細部を見ればさらに検討を要する課題は残されているであろう。例えば公開審査会の際にも、「経量部」という学派名称が確立する以前の先駆的伝統をどのように呼ぶのか、「灌頂」の範囲をどのように理解するのかといった問題に加え、細かな文献の解釈・処理に関するいくつかの提案・指摘がなされていた。しかし、今後『声聞地』を議論する上で必ず参照すべき成果となることは間違いないと思われる。以上の理由から、博士学位の授与に相応しい論文であると審査委員の全員一致で判断した。

公開審査会開催日	2020 年　12 月　19 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	山部　能宜	インド仏教学	Ph.D.(イェール大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	大久保　良峻	中国・日本仏教学	博士(早稲田大学)
審査委員	東京大学大学院人文社会系研究科・准教授	高橋　晃一	インド仏教学	博士(東京大学)
審査委員				
審査委員				